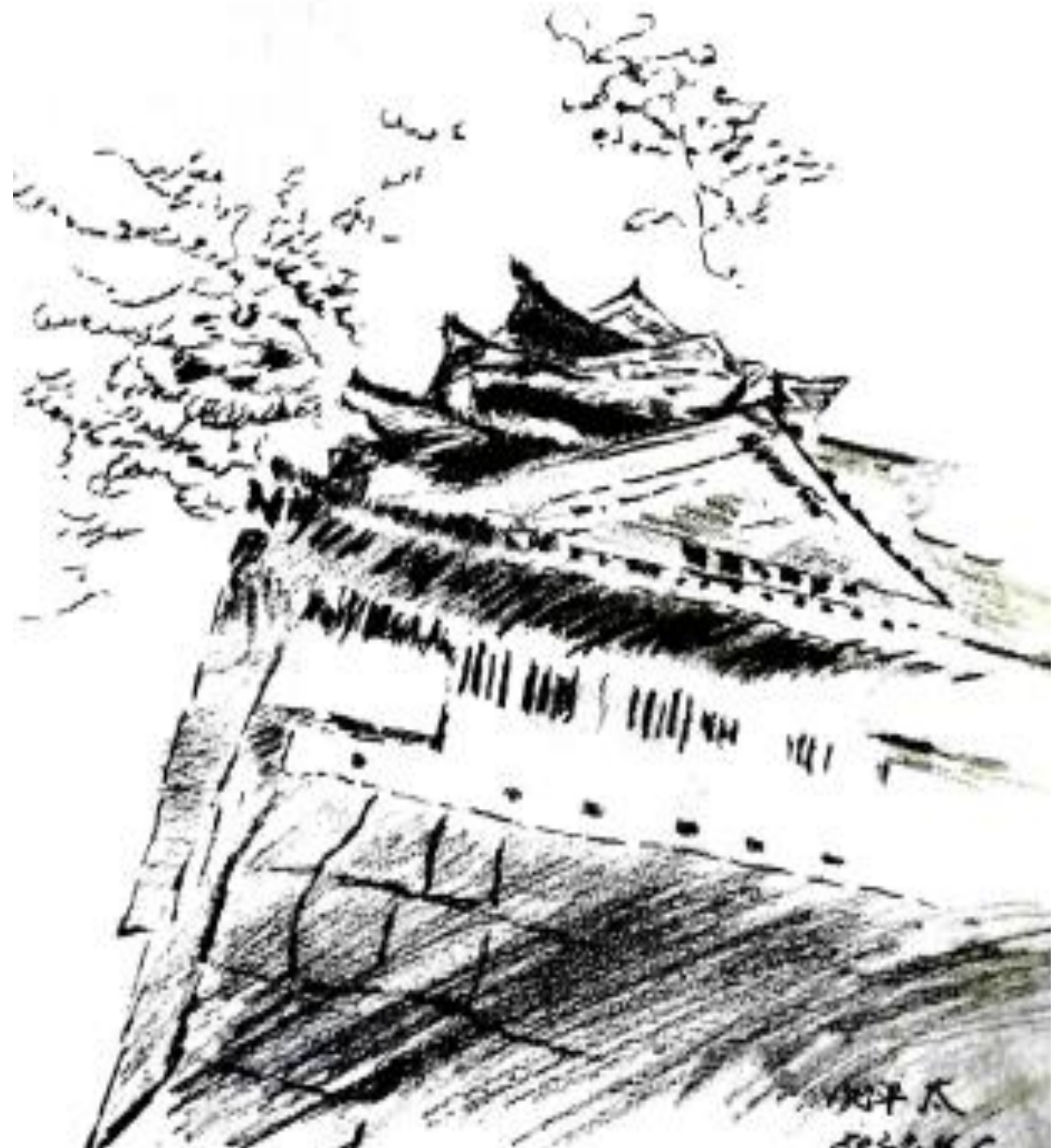


閣守天柳川

2024年10月号



第18回例会 2024年9月15日(日) 投句締切分

お題 「猫」

岡野とら丸 選

猫といるとやさしいヒトになれるから
招き猫ああ疲れたと手を下す
猫の住む島で人間とりもどす
猫を抱くずっとわたしのままで抱く
猫の足借りて半紙に梅の花
猫ほどの根性もなくさびしがり
吾輩は主人癒しの猫である
ありました猫の手借りた子育て期
なびかないプライド高き野良の猫
慣れてます猫なで声の出る気配
恋捨てて拾って帰る野良の猫
鼻濁音や猫撫で声は高くつく
(五客)

信子
松谷由夏
秋田あかり
直子
井澤壽峰
秋田あかり
堀内きみ子
佐野正邦
美代
佐野正邦
直子
山野寿之
井澤壽峰
東尾由子
真鍋心平太
松谷由夏
三枝なな

(三才)

人 キーボード猫も一緒にキーを打つ
堀内きみ子
地 時々猫の顔して座ってる
林ともこ
天 町内のことは詳しい猫に聞く
船木しげ子
軸 タマだけが家族の秘密知っている
岡野とら丸

(選評)

人の句

猫は人間と同じ視線に居たいようだ。机、ピアノ、新聞の上などがお気に入り。だからパソコンを打つ飼い主の机に座りたがる。時々猫がキーで遊ぼうとしているのか。ほのぼのとした様子が浮かびます。

地の句

普段は賑やかで物怖じはしないのだが、時と場合によっては、敢えて「借りてきた猫」となることがある。そんなことも世間を渡るには必要な時があるでしょう。

天の句

猫が塀の上を歩いたり、日向ぼっこをしたりと気ままに過ごしている様子が浮かびます。それは情報収集を兼ねているのでしょうか。すると、この句は的を得ていて面白い。「詳しい」が効果的な言葉となっている。

お題 「面」

松谷由夏 選

- 山仲間真面目な友の心知る
見ってしまう鏡の中の二面性
夜も更けたそろそろ人の面取るか
面の皮シワシワなれどなお厚し
人前と孫の前とで二面相
赤面の初恋なぞる万華鏡
感情を能面の裏秘めている
鬼の面被って豚母の愛
面接で引き剥がされた金メッキ
面影が重なっている朧月
本性を包み隠している仮面
赤ちゃんの天下取るよな大あくび
- 東尾由子
林ともこ
佐野正邦
勘兵衛
勘兵衛
堀内きみ子
ルイ
堀内きみ子
岡野とら丸
春田敏晴
井澤壽峰
青空
- 佳5 裏面に残ってました重い罪
佳4 悪魔にもなれる仮面を隠し持つ
佳3 人間の仮面ゴシゴシ丸洗い
佳2 人生の断面にある青い傷
- 直子
島根写太
山野寿之
秋田あかり

佳1 矢面に立てば溢れる正義感

島根写太

(三才)

- 人 面倒な話し土産に叔母が来る
地 満面の笑みがほごいたわだかまり
天 いい人と言われ仮面が外せない
軸 生きてきた歴史表す面構え
- 松島きよみ
秋田あかり
林ともこ
松谷由夏

(選評)

人の句

歓迎されないお客様も居るんです。
急に訪れて問題を持ち込む、中々やっかいな土産。持って来るのが叔母というのが微妙な関係でなんとも面白い句です。

地の句

人の表情って大事です。怒っていても相手の表情で気持ち解けていきます。

口角を上げて笑っていたいものです。

天の句

誉められすぎると、お尻がこぼれなくなり本当の自分を出せなくなる
ことってありますよね。
いい人ぶってる訳ではないんですが……

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

秋茄子の美味を語って差向かい

歎かく夫が隣にいる安堵

人情の砂漠で人が干からびる

言わなくていいことでした彼岸花

法師鳴きほつと一息かき氷

水晶の夜にユダヤの曼珠沙華

脳ミソが右に寄ったか首のこり

失敗に人生ドラマ秘めている

星祭り夢より多い願う欲

本当は是で良いかと風に聴く

火柱を人が上げてる陣地取り

一日のとあるところに滝の音

拉致の娘を待ち侘ぶ母はもう米寿

(五客)

佳5 友別れ胸熱く見る百日紅

佳4 虫すだく思い出ばかりよみがえる

佳3 墓場まで連れて行きます男眉

佳2 限りのない世界に旅と本がある

佳1 買い物さえ嬉しいと言う夫の老い

山野寿之

林ともこ

岡野とら丸

直子

美代

平川柳

秋田あかり

堀内きみ子

船木しげ子

堀内きみ子

松谷由夏

春田敏晴

井澤壽峰

東尾由子

秋田あかり

直子

信子

青空

(三才)

人 じいちゃんもばあちゃんも居た夏休み

林ともこ

地 母が待つ小走りの足面会日

松島きよみ

天 必携のスマホに売れぬ文庫本

山野寿之

軸 マンゴーよりスイーツな熟柿

真鍋心平太

(選評)

人の句

中句の最後「も居た」がこの句の要である。

過去形であるから「今はもう居ない」ことが

分かる。再びは巡ってこない懐かしい夏休みの句。

地の句

以前おばちゃんは良く必要のない小走りをする、と

聞いたことがある。この句の「小走り」はそうではなく

母に会いに行くための「必要な小走り」である。

まるで映画の1シーンのようで胸を衝かれた。

天の句

二物衝撃の見本である。今や手放せなくなったスマホが

金科玉条だとすれば、売れない文庫本は「いぶし銀」で

ある。この取り合わせこそ俳句には真似の出来ない

川柳の二物衝撃である。

お題 「魔法」

互選

1点

△が神秘魔法を解き明かす

△にいずれにんげん匙投げる

裏がねが選挙の魔法でどこへやら

爽やかな笑顔の魔法人気者

イケメンに恋の魔法にかけられた

心を掴む魔法の言葉オノマトペ

沈む夕陽にトリック解き明かす

深夜すら温い熱帯夜の魔法

天窓の下で魔法待っている

歳を取り魔法使いに雇われる

その節はお世話になった魔法です

鹿ヶ谷かぼちゃにかけられた魔法

褒め言葉魔法がかかりやる気です

オオタニさん神の魔法かアミダクジ

STの煙アイズノーランドを走る

科学の目魔法使いを喝破する

あるんです魔法ほんとにあるんです

魔法とは共に信じ合う心

魔法水発酵の後美酒になり

魔法かも知れぬ突然消えた影

掌に大きな春が乗っかって

ふくん そつ目を逸らさずにつなずかれ

トットちゃん真似て育てた我が家の子

ルイ

武智三成

岩原一角

東尾由子

松谷由夏

蔵内歳重

島根写太

島根写太

直子

信子

信子

小林満寿夫

船木しげ子

松島きよみ

小林満寿夫

岡野とら丸

佐野正邦

平川柳

ルイ

井澤壽峰

真鍋心平太

三枝なな

青空

3点

平和願いチンパイ青い星
恋という遠近まるで魔法なり
俺様は川柳暮らし魔法かい

松島きよみ
真鍋心平太
岩原一角

4点

校門を出ると私は生き返る

転んでも母の魔法で痛み飛び

若返る魔法ありきと詐欺師舞う

運命線いまでも二人で歩いている

プーチンに休戦せよと魔法かけ

拘りの魔法が解けて虹を抱く

大丈夫魔法の言葉かけぎゅっと

好きになる魔法でしようか長い指

撫でられて痛い痛い飛んでった

どんな魔法よりもママのちんぷい

ありがとう愛と勇気になる魔法

魔法の水元気になれる酒二合

母の言葉少し魔法がかかっている

魔法とけ離婚届に判を押す

幸せと呪文唱えて生きている

9点

九十一年魔法のような世に生きる

好きだよが魔法のように効いてくる

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

5点

大丈夫魔法の言葉かけぎゅっと

好きになる魔法でしようか長い指

撫でられて痛い痛い飛んでった

どんな魔法よりもママのちんぷい

ありがとう愛と勇気になる魔法

魔法の水元気になれる酒二合

母の言葉少し魔法がかかっている

魔法とけ離婚届に判を押す

幸せと呪文唱えて生きている

九十一年魔法のような世に生きる

好きだよが魔法のように効いてくる

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

得点が空白のものは前行の句と同得点です。

お題 「背」短句

互選

1点

老いの丸い背見上げる夕陽
咳する背さする紅葉の手が
実力足らず背伸びする
肩書き取れた背化欠伸する
バックミラーに遠ざかる人
背中合わせで仲良し夫婦
父の背骨は大黒柱

秋風を背にサヨナラ告げる
計算式は天下泰平

背中合わせの男と女
わたくしの木と背くらべする
風の背に触れ龍となる空

筋の通った彼の生き様
無音の大河父の背のごと

枕並べて妹背のふたり
背中を見ると話しかけたい

父の背中に戦地の苦労
切り抜き加工背景にパリ

背筋伸ばして貧しさに克つ
ポーチはいらぬ背広は無敵

背を向け手振り巣立ちゆく子等
座禅の背を撫でる御仏

大海を背に沈む夕焼け
今更きずく父の背の愛

今更きずく父の背の愛

3点

2点

山野寿之

松島きよみ

東尾由子

船木しげ子

春田敏晴

ルイ

山野寿之

秋田あかり

小林満寿夫

東尾由子

直子

平川柳

蔵内歳重

秋田あかり

平川柳

信子

堀内きみ子

三枝なな

岡野とら丸

三枝なな

美代

真鍋心平太

井澤壽峰

青空

4点 父の背には無言の教え

5点 近くて遠い背中の中のシップ

背伸びして見る都会の景色

本音は言えず背中むずむず

「シャツの背に猛暑乗つかかる

6点 父の背消えたウクライナの子

背びれをつけて世間を泳ぐ

7点 背中に書いた好きはあのまま

私の背中押す好奇心

丸い背中が語る人生

11点 牛の背撫でて父の落涙

井澤壽峰

堀内きみ子

林ともこ

直子

ルイ

武智三成

松谷由夏

真鍋心平太

松谷由夏

美代

武智三成

今月の投句者(27名 敬称略)

井澤壽峰 加山勝久 勘兵衛

山野寿之 岩原一角 信子

武智三成 平川柳 ルイ

青空 林ともこ 秋田あかり

直子 松谷由夏 岡野とら丸

小林満寿夫 堀内きみ子 佐野正邦

島根写太 船木しげ子

春田敏晴 松島きよみ

三枝なな 真鍋心平太

美代

蔵内俊重

東尾由子

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載 評論 「現代川柳の詩学」を考える ⑨

―川柳の技法(4) 比喩・擬人法

―「古川柳」から現代川柳へ―

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳 (東京川柳会主宰)

次に人間以外のものを人間に喩える「擬人法」についてご紹介したいと思います。これは無生物や抽象観念に人の感情のような性質を与え、「人に喩える」^{たと}比喩法です。

「擬人法」は英語では「パーソニフィケーション」(personification) といえます。これは古代ギリシアでは自然現象を神話の神の名であらわす比喩法として発達しました。例えば、太陽神は「アポロン」、月は「セレナ」など。この比喩法はギリシア語 (prosopopeia) が語源です。詩の修辭法で「活喩」ともいわれました。

例えば、雨が降っている様子を「擬人法」で表現すると、「空が泣いている」となります。

『誹風 柳多留』(六篇)には、次のような「擬人法」を用いた「古川柳」があります。

うたゝ寝の書物は風をくつて居る

この「古川柳」の前句は「ながめこそすれ、ながめこそすれ」です。夏の昼下がりに、ねころんで本を読んでいた人が本を枕元に置いてうとうとして寝てしまうと、風が吹いて本のページを時々、めくっている風景です。

この「古川柳」では、そうした状態を「擬人法」を使って「うたゝ寝の書物」が「風をくつて居る」と表現しています。

『誹風 柳多留』(六篇)には、このような「擬人法」の比喩表現を用いた川柳が収録されていますが、次のような現代川柳にも「擬人法」が用いられています。

無才無能の時計に毛が生えている

十四世川柳 根岸 川柳

この川柳は昭和三十三(一九五八)年、作者が七〇歳を迎えた作品です。『根岸川柳作品集 考える葦』(一九

五九年刊)の「毛穴」の章に収録されています。

この川柳作品は川柳宗家である根岸川柳が川柳作家として変貌を遂げ、新しい現代川柳の作風を確立した時代のものです。

この川柳作品では「擬人法」が用いられており、作者は自らを「無才無能の時計」に喩え、みずからの体内を流れ去っていった過去の「時間」を眺めているのです。

作者は自己を「無才無能」と感じながら、「毛が生えている」という表現を通して、今まで過ごしてきた体温のある過去の人生を振り返っています。特に根岸川柳は七〇歳を迎えても、「定着を否定し、常に前進する」姿勢で川柳を創作し、川柳作家として自己変革を遂げています。

これは常人にはできない事です。そこには川柳作家としての「^{うが}穿ち」の精神が強くあらわれています。『根岸川柳作品集 考える葦』の巻頭には作者のポートレートが掲載されています。白髪とロイド眼鏡とマドロスパイプ。その写真の眼の鋭さに川柳作家としての「穿ち」の精神が漲っています。これが川柳作家の風格といえるものな

のでしょう。昭和五十二(一九七七)年に逝去。八十九歳でした。

以下、「擬人法」を用いた現代川柳を紹介します。

馬が算盤をはじいて戦後の荷を下す

十六世川柳 青田川柳

蓬髪ほうみの風も神も寝たまえり

岡橋 宣介

神経を陽にさらされた木の嘆き

田中五呂八

いま生きている素うどんがあたたかい

定金 冬二

原爆囃口開かんと声を出す

泉 淳夫

手と足をもいだ丸太にしてかへし

鶴 彬

転がったところに住みつく石ひとつ

大石 鶴子

石泣いてがんがん棺の釘を打つ

佐藤 岳俊

たましいはほつほつ点り木の傷み

細川 不凍

トンボ死す 目玉に百の空残し

野沢 省吾

蓑虫が笑った本当に嗤った

神前 阿字

罪犯す椿が落ちるまた落ちる

大西 恭世

もうなにも選べませんという夕陽

真島久美子

(続く)

「愛の人」

真鍋心平太

日本の作家の中で一番借金の返済に苦慮したのは、恐らく夏目漱石だろう。妻・鏡子の父が有名な山形有朋内閣の貴族院書記官長の中根重一で、この人は商品先物取引に手を出して数億円の借金を抱え込んだ。当時の東京帝国大学卒の初任給が三十円だったのであったからいかに莫大な借金だったかが分かるというものだ。中根家は牛込の旧新潮社の敷地にあった。牛込一の金持ちだった。屋敷は借金の形に取られ中根一家は追い出された。その借金が娘婿の夏目金之助（漱石）の肩に掛かって来たのである。

金之助は当時東京帝大講師で年収は千五百円ほどであった。嫁を生家に追い返そうとしたが、鏡子は涙ながらに「おいて下さい」と頼み、金之助はそれを受け入れる。つまり重一の借金を引き受けたのである。

しかし、月々の給金だけでは借金は返せない。金之助は漱石という名で小説「吾輩は猫である」を書き始める。その印税で借金を返済して行こうとしたのである。これに目をつけたのが讀賣新聞で年収九百円で引き抜こうとしたが漱石は応じなかった。すると朝日新聞が年収二千八百円で引き抜いた。漱石はそれから十年余り朝日新聞に小説を書き続けた。いずれも傑作で死んだのは満四十九歳の冬である。が、この時点ではまだ相当量の借金が残っていた。死後弟子の岩波茂雄が「漱石全集」を刊行してその返済に尽力した。完済したのは、漱石の死後、十年以上過ぎた頃であったそうなの。

もし、金之助が中根重一の借金を引き受けなければ金之助は恐らく東京帝大の英文学教授として長寿をまっとう出来たであろう。漱石が「愛の人」であるといわれる所以である。

第18回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「見逃し」 勘兵衛 選
「優しい」 東尾由子 選
「ぼんやり」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「返事」(短句) 互 選
(投句 各 2 句)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。
<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。
会員登録は下記 URL より
https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから

投句開始 2024年10月9日(水) から

投句締切 2024年10月15日(火) まで

互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。

10月16日(水)～9月19日(土)

披講発表 10月20日(日) から随時閲覧可能になります。



投句・閲覧



会員登録



鉛筆+パステル画

(東寺の立体曼荼羅)

クリックで大きく表示

二〇二四年九月二十五日発行
ウェブ川柳天守閣会報

(発行責任者 真鍋心平太)

(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

TEL・fax 077(532)4211

携帯 080(2672)4446